

第58回中国・四国地区大学教育研究会(第2部会「評価」)

ポリシー×カリキュラム×アウトカムの最適化に向けて:  
卒業生に対する学習成果(ラーニング・アウトカム)調査  
の結果を踏まえて

山田剛史/鳥視大学教育開発センター講師・副センター長  
森 朋子/鳥視大学教育開発センター准教授

### 問題の所在

- 高等教育のグローバル化・ユニバーサル化
- 社会的圧力/説明責任(アカウンタビリティ)
- 国立大学法人化/外部評価(認証・法人評価)
- 競争原理(GPなど)
- 学部教育→学士課程教育(学士学位の持つ意味再考)
- 中教審「学士課程教育の構築」
- FDの法制化(義務化)
- 大学教育の質保証/出口管理

### そこで...卒業生調査に着目

こうした視点はFDやカリキュラム構成にも浸透

- 視点(構成)の転換

	大学(教育)	学生(学び)
従来型(上)	◎	△
本調査(下)	○	◎

学生は、自己と切り離された形で大学(教育)を評価するのではなく、自身が大学(教育)を通じて何を身につけたのかといった自己(学び)と大学(教育)とを結びつけた形で評価するといった視点に立って調査デザインを行った。

### 調査の概要

(1) 調査対象者・実施方法  
国立5大学の2008年3月に卒業する学生1144名に配付し、回収された657名(回収率57.4%)が対象。

法文	教育	医	総合理工	生物資源科	合計
140名(21.3%)	124名(18.9%)	35名(5.3%)	187名(28.5%)	171名(26.0%)	657名(100.0%)

(2) 調査時期  
2008年7月中旬～3月末日

(3) 調査内容

- ①卒業後の進路、就職先の職種といった就業に関わる項目(2項目)
- ②在学時の成績に関する項目(1項目)
- ③在学中の正課・正課外活動へのコミットメントとその有意性に関する項目(3項目)
- ④在学中の自己形成的態度に関する項目(2項目)
- ⑤大学教育、学習・生活支援に関する満足度に関する項目(11項目)
- ⑥教育体系全体、教養教育、専門教育それぞれの改善要求度に関する項目(14項目)
- ⑦大学満足度に関する項目(1項目)
- ⑧学習成果(ラーニング・アウトカム)に関する項目(40項目)

各項目に対して、a.授業全体(予習復習を含む)、b.授業以外での活動(部活やバイト、友人関係等)それぞれを通じてどの程度身についたかといった観点から問うている(4件法)。

### 大学生の学習成果(ラーニング・アウトカム)尺度の構造分析

- 学習成果(ラーニング・アウトカム)の項目策定に関しては、これまでに提起されている様々な学習成果指標(「学士力(中教審)」「社会人基礎力(経済産業省)」「キーコンピテンシー(OECD)」「泰代表科研調査(2007)」、各大学の卒業生調査等の項目などを参考に、共通する項目やダブルプレースの項目、分かりにくい項目、単純化されすぎている項目などについて適宜追加・修正等検討を行い、同僚と協議の上、最終的に40項目からなる大学生の学習成果(ラーニング・アウトカム)に関する項目群を作成した。
- 複数の調査で因子分析を重ね、最終的に35項目8因子に収束

⇒資料①

### 例①: 正課と正課外の差異(山田・森, 2008a)

- 問い: 正課活動と正課外活動とで、得られるラーニング・アウトカムにはどのような違いが見られるのか?

因子	正課	正課外	t値
F1.批判的思考・問題解決力	17.23(3.2)	17.14(3.7)	0.70
F2.社会的関係形成力	18.24(3.8)	19.32(3.3)	-7.50**
F3.持続的学習・社会参画力	17.57(3.3)	18.05(3.4)	-4.06**
F4.知識の体系的理解力	13.46(2.5)	13.67(2.7)	-2.03*
F5.情報リテラシー	12.41(2.1)	10.61(2.7)	15.24**
F6.外国語運用力	4.67(1.6)	4.01(1.7)	10.18**
F7.母国語運用力	5.68(1.2)	5.59(1.3)	1.73
F8.自己主張力	10.88(2.3)	11.46(2.4)	-6.64**

\*\* p<.01 \* p<.05 数値は平均値(カッコは標準偏差)

正課と正課外では、身につけやすい能力に差異がみられる。いたずらに一般的に求められているものを全て正課で実現させようというのではなく、正課外の持つ教育的効果にも配慮しながら、トータルに実現できる教育環境(ハード面・ソフト面)を整備することが求められる。

## 例②: 学部(学問領域)間の差異

あくまでジェネラルなスキルなので、全ての要因において高い値が期待されるが、学部(学問領域)の性質によっては、得やすいor得にくい要因が存在し、その特殊性をも考慮して教育環境を整備することが求められる。

- 問い: 学部(学問領域)間で、得られるラーニング・アウトカムにはどのような違いが見られるのか?

学習成果の学部間の差異(N=624-639)							
因子	1.法文	2.教育	3.医	4.総合理工	5.生物資源科	F値	多重比較(LSD法)
F1.批判的思考・問題解決力	34.35	35.22	36.06	33.31	34.54	2.84*	2, 3 > 4
F2.社会的関係形成力	37.78	38.53	40.17	36.47	37.30	3.90**	3 > 1, 4, 5 / 2 > 4
F3.持続的学習・社会参画力	35.05	36.69	38.27	35.10	35.34	3.34*	2, 3 > 1, 4 / 3 > 5
F4.知識の体系的理解力	27.19	26.67	26.15	27.38	27.33	0.97	—
F5.情報リテラシー	22.82	22.80	22.88	23.02	23.40	0.58	—
F6.外国語運用力	8.87	8.42	9.06	8.85	8.47	0.89	—
F7.母国語運用力	11.67	11.47	10.94	11.17	10.96	2.65*	1 > 4, 5 / 2 > 5
F8.自己主張力	10.78	11.34	11.23	10.99	10.42	3.57**	2, 3, 4 > 5 / 2 > 1

\*\* p<.01 \* p<.05 数値は平均値(カッコは標準偏差)

## 例③: 卒業生のニーズ(鳥根大学教育開発センター, 2008)

- 2003年~2005年度卒業生(卒後1~3年経過者)への調査
- ラーニング・アウトカムの差(正課・正課外・ニーズ) ⇒ 資料②
- 圧倒的に高いニーズ

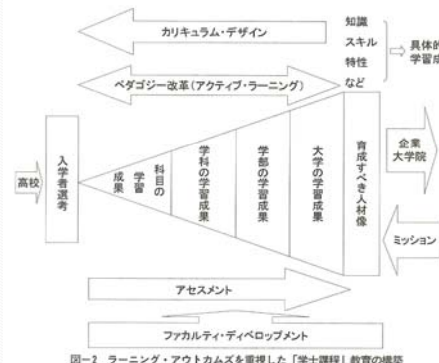
経産省や文科省等外部者の論理だけでなく、その必要性を訴えているわけではなく、卒業生個々人のレベルでも実社会の中でこうした「力」の必要性が示されている。

## カリキュラム構築の必要十分条件

- ディプロマ・ポリシー(DP)の明確化
  - 学士課程全体のDP
  - 分野別のDP(教養教育/専門教育→更に領域ごとに)
- 具体的なアウトカムへのブレイクダウン
  - 共通のアウトカム(ジェネリック・スキル)
  - 分野別のアウトカム
- シラバスの改革(実質化)
  - DP, アウトカムと個別授業が対応
- 絶えざる対話
  - コミュニケーションが全てのカギ

この一連のプロセスは、まさにFDの本来的意味を内包している。故に、カリキュラム改善(CD)とFDは不可分離の関係で進行していくもの。

関連参照資料  
ラーニング・アウトカムズを重視した「学士課程」教育の構築(川嶋, 2008, p.27)



## 留意点・課題

- 大学論的パースペクティブ
  - アウトカムの達成が大学教育の目的になってはいけない
  - むしろ副次的に達せられるよう留意しなければならない
  - アウトカムに一定の自由度を設けなければならない
- 学習成果概念の文脈性(山田・森, 2008b)
  - 学習成果(能力)獲得が卒後キャリアと結びつかないという結果
  - 同じ能力でも、大学で身につけるそれと仕事におけるそれとは、異なる可能性が示唆。
  - いま、大学で身につけさせようとしているものは一体何なのか?
- 大学教育の運動性(吉本, 2004)

## 引用/参考文献

- 川嶋太津夫 2008 学士課程教育の構築に向けて—その論点と課題— 大学教育学会誌, 30, 25-28.
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会 2008 学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ).
- 日本学術振興会平成16-18年度科学研究費補助金研究基盤(B)(一般) 2007 大学における学生の質に関する国際比較研究—教育の質保証・向上の観点から—(研究代表者: 秦由美子) 中間報告書.
- 鳥根大学教育開発センター 2008 鳥根大学卒業生・修了生に対する教育成果の検証に関する調査報告書<<2003年度~2006年度版>>.
- 山田剛史・森 朋子 2008a 大学生の学習成果(ラーニング・アウトカム)(1)—その構造と正課・正課外の差異— 大学教育学会第30回大会要旨集録集, 印刷中.
- 山田剛史・森 朋子 2008b 大学生の学習成果(ラーニング・アウトカム)(2)—就業との関連から— 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 印刷中.
- 吉本圭一 2004 高等教育と人材養成—「30歳社会的成人」と「大学教育の運動性」— 高等教育研究紀要, 19, 245-261.